

〈論文〉

異文化交渉とミディエーション
—幕末の異文化間ミディエーター：ジョセフ・ヒコ(シリーズ1)—

Intercultural Negotiation and Mediation
A Series of Transcultural Mediators: Joseph Heco (Part 1)

御手洗 昭 治

As L. Huddleston put it, “By the very nature of human societies, we will always have conflict.” People have attempted to deal with this through their own personal negotiation or when that fails through their legal systems. Transcultural mediators (TCM), however, facilitate disputants from two or more cultures, working together to come to mutually beneficial resolutions. They work directly and indirectly in partnership with disputants to facilitate clear communication and collaborative problem solving. This results in respectful and cost effective reciprocal outcomes. Here I shall focus my main attention on Joseph Heco — the first Japanese in the late 19th century who became a naturalized U.S. citizen and his contributions as a TCM across the Pacific in the context of intercultural negotiation and mediation.

Heco served, from his official position, as interpreter to the U.S. Consulate — and from the fact in those early years he was almost the only Japanese who spoke English in negotiating settings. Inasmuch as the following subjects — Heco’s extraordinary occasions for observing and hearing things from two standpoints and his unusual visits to the White House to meet with President Abraham Lincoln — are to be treated in the second part of this article, this section deals with: (1) in what way Heco witnessed tortuous plots and intrigues that preluded the overthrow of the Tokugawa Shogunate; and (2) his internal or psychological struggle as a transcultural mediator across the Pacific at the time when Japan found itself at the crossroads.

トランス・カルチュラル・ミディエーター (TCM) をあえて定義づけるなら、異文化を

バックグラウンドとして有する個人、または団体の間で、問題、傷害、支障、紛争が起きる可能性があるとして察した場合、第三者的中立の立場を保持しながら、複数の文化を超越 (Trans) し、グレート・コミュニケーターと、さらにグレート・ネゴシエーター (交渉者) の両方のスキルを駆使して、未然に解決または処理することのできる人物である。⁽¹⁾

「序文」

今から約百四十年前の幕末の時代に、いち早く海外生活を活かして、日本の近代化に大きく貢献した先駆者達が存在していた。その一人が日系アメリカ人第一号と言われたジョセフ・ヒコ (浜田彦蔵) である。

五十日以上に及ぶ漂流の末、アメリカに渡り高等教育を受けた彦蔵は、アメリカ上院議員の秘書、在日アメリカ領事館の通訳などを務めた後、日本で初めて新聞 (海外新聞) を発行したことでも知られている。

又、ヒコは、リンカーン大統領と握手したただ一人の日本人でもある。坂本竜馬を始め、伊藤博文、木戸孝準一郎に民主主義の実際を語り影響を与えた彦蔵は、自ら国会設置の進言、国立銀行の条例の作成などにも努めた。そして、近代日本の礎を築くためにその英知を傾け、有形無形の業績を残したのである。

以下では、(1)異文化間ミディエーターとしてのジョセフ・ヒコの功績を神奈川開港、日米通商条約交渉、神奈川・横浜問題に関連させ考察を行い、(2)歴史学者であるマードックが監修した彦蔵の自叙伝を取捨選択し、リンカーン大統領との会見について探り、最後に(3)近年アメリカでもブームになった「リンカーンの三分間」の書評を加えてみたい。

以上のテーマを取り扱う前に、まずはジョセフ・ヒコのバイオ・データーを紹介したい。

ジョセフ・ヒコ (浜田彦蔵) は、天保八年 (1837 年) 8 月 21 日、現在の兵庫県加古郡播磨町大宮に生まれる。幼名は彦太郎。ヒコ (1837-1897 年) は十三才の時に「栄力丸」の船旅の途中、他の十六人と共に遭遇し、米国商船「オークランド号」に救助される。やがて、アメリカに渡りミッション・スクールに入学。1854 年にメリーランド州ボルティモアの教会でカトリックの洗礼を受ける。その間、1853 年 8 月にピアース大統領、1857 年 11 月にはブキャナン大統領と会見の機会を得、上院議員の秘書を努めた。米領事館通訳として帰国する際、アメリカへ帰化した日系人第一号となる。幼名であった彦太郎をこの時、ジョセフ・ヒコと改めた。

ジョン M. ブルックス船長のはからいで、ヒコは調査船「クーパー号」で 1858 年 9 月、サンフランシスコから日本に向けて出向。途中、香港に立ち寄り、近くの広東を訪れた際、そこで七年前に別れた栄力丸の同僚でもあり、音吉⁽²⁾の世話にもなった伝吉 (岩吉) が英

国領事オールコック（Rutherford Alcock）の世話になっているのに遭遇*。上海では、アメリカの下田領事から新駐日大使に昇進したタウンセン・ハリス（Townsend Harris）を訪ねる。そして、ヒコが日本からアメリカへ帰化した証明書を見せると「これは珍しい人物だ」と早速、新任の神奈川領事ドール（Dorr）の通訳に採用される。

ハリスとヒコの乗せた「ミシシッピー号」は安政六年（1859年）六月十七日、長崎に入港。これはヒコにとって九年ぶりの帰国となる。時にヒコ二十一歳であった。アメリカ人とばかり思っていたヒコの口から日本語で話しかけられた日本側は、仰天したという。

ヒコの自叙伝には長崎上陸に関しての記載がない。ただし、長崎から神奈川に到着するまでにミシシッピー号が下田に寄港した時、士官に伴って上陸したことは自叙伝にも触れられている。そして、神奈川領事館通訳に決まる。1861年9月に三度目の渡米の途に着く。1863年9月に領事館辞任。横浜で再び商館を開く。1864年6月に「海外新聞」を発行。1865年の同新聞において、リンカーンの暗殺ニュースを伝える。翌年12月に横浜を去り長崎に向かう。1872年8月から一年間、ヒコは長州一派につくしたという理由もあり、井上馨蔵卿の計らいで大蔵出任となり「国立銀行条例」の編纂（へんさん）に従事し、新政府の職員として働く。この間、ペルーの奴隷船の「マリア・ルース事件」の通訳としても活躍した。1877年四十歳の時、神戸郊外の東明村に住む（銀子婦人との結婚はこの頃であったと推測される）。神戸では製茶の輸出貿易や精米所も始める。1888年に東京に移り住む。1895年「ナレティブ」下巻も完成。1897年12月12日に、心臓病で死去。時に六十歳。青山の外人墓地に静かに眠る。

「安政六年の幕末外交の舞台」

ヒコが正式にアメリカ市民として、幕府から扱われるようになったのは、安政六年（1859年6月）、神奈川に到着した時からである。ハリスが神奈川奉行の酒井隠山支守（行忠）に

*（注）音吉（おときち）とは、尾張出身の人物で生没年は不明である。音吉は、1832年十四才の時に回船宝順丸で遭難。仲間の岩吉や久吉とともに十四ヶ月遭難の後、現代ではアメリカのファー・ウエストかカナダ沿岸に漂着したと伝えられている。ネイティブに助けられイギリスの「英国ハドソン湾会社」に引き渡され、マカオまで回送された。しかし、1837年の日本側のモリソン号への発砲事件（通称「モリソン号事件」）が起こった為、音吉は日本帰国を断念せざるをえなかった。「モリソン号事件」後は、上海に在住しイギリスの「英国商会」に勤務するかたわら日本人の漂流者の世話をした。1853年黒船のペリー提督のアメリカ東インド艦隊が、送還する手はずだったジョセフ・ヒコの仲間をアメリカ側から救いだし、中国の「清国船」で帰国させた話は現代でも語り継がれている。音吉は英国艦隊の通詞として日本を訪問することはあったが、日本には帰国することなく幕末の時代を生き抜いた人物であった。音吉に関しては、「にっぽん音吉漂流記」⁽⁹⁾が詳しいので参照されたし。

交渉してからであった、と近盛氏も述べている。

同じく、漂流民であったジョン・万次郎（中浜万次郎）は帰国後は取り調べの連続であり、幕府からも常に疑いを持って見られていた。攘夷派の徳川斎昭からも、万次郎はアメリカで恩義を受けていたので、日本の国益に反する行動を取るのではないかという思いもよらない警戒が向けられていた。「ヒコの「漂流」の先輩格にあたるジョン・万次郎は、当然幕府の通訳として用いられるところを、幕府の保守派ことに水戸烈公（斎昭）の反対で、1860年（万延元）遣米使節の通訳として渡米するまで外交の交渉舞台には姿をみせなかった」⁽⁴⁾

一方、ジョセフ・ヒコは、神奈川の米国領事館通訳として幕末外交界の第一線に登場した。安政五年六月十九日（1858年7月29日）の日米修好条約の席で、新たな日米関係の中でより大きな新しいチャンスをつかもうと狙っていた。当時の日本に欧米の文明のいぶきを取り入れるのに、ヒコは無くてはならない調停者、つまりミディエーターとして活躍したのである。

「通商と開国」

安政四年（1857年）十月二十六日、アメリカ総領事タウンセン・ハリスは、堀田睦正閣老邸を訪問した。そして、堀田に世界の現状を説明し、蒸気機関の出現によって世界の情勢が一変したことをまず語り、次の点を力説した。「日本は好むと好まざるとにかかわらず、鎖国政策を放棄しなければならなくなるだろう。そして、日本の国民が、持ち前の器用さと勤勉さを自由に使うことが許されれば、日本は遠からずにして偉大な、そして強力な国家となるだろう。」しかし、この生産は国民の必要とする食料の生産を少しでも阻止する物でなく、日本が現在持っている過剰労働力を使用することによって振興されるとも力説した。

又、ハリスは、貿易に対する適当な課税に関しては、「（それは）まもなく日本に大きな収益をもたらす、それによって立派な海軍を持つことができるようになるし、自由な貿易の活動によって日本の資源を開発するならば、莫大な利益をあげることができるだろう」。続いてハリスは、国際防衛危機管理の面から次の点をつけ加えた。「諸外国は、争って強力な艦隊を日本に派遣し、開国を要求するであろう。日本はそれに屈服するか、さもなければ戦争の惨苦をなめなければならない。たとえ、戦争は起きないにしても、日本はたえず、外国艦隊の来航に脅かされなければならないだろう」と。その結果、日本はアメリカとの武力衝突を回避する事ができたのである。

上記のハリスの対日通商政策を、百五十年たった今日の米国の対日通商交渉と政策に照

らし合わせると、次の点が指摘できる。

近年のアメリカの対日交渉は、ハリスと同じ様な政策を取っているにもかかわらず、対応に関しては、批判される点が多い。特に米国のシンクタンクの日米関係の研究者達は、一般に今回のクリントン政権の対日通商交渉政策（'95年6月のハリファックス会談以前）を、失敗として受け止めている。例えば、米ブルッキングス上級研究員のM.モチズキ氏などは、クリントン政権の対日政策の最大の失敗は、米政府が日本の国民を敵に回したこと。アメリカ国民を説得するよりも日本国民を説得しなければならないにもかかわらず、日本の改革勢力さえも敵に回したことであったと指摘する⁽⁵⁾。

その理由は、まず(1)アメリカ側も日本側同様に政策が明確でなかったこと(日米双方戦略なき「漂流」期間)。(2)アメリカの対日政策の担当者のほとんどが日本の政治の知識に乏しく、日本専門家ではないこと。(3)日本での広報活動をもっと展開すべきであった。外圧方式でなく、日本の改革勢力と組んで内圧方式のキャンペーンが必要であった。

「神奈川開港とヒコのミディエーション」

安政六年六月五日（1859年7月4日）とは「交渉」末、神奈川開港が公式に定められた日である。この日を境に、長く鎖国で閉ざされていた日本の窓がアメリカに向かって開かれ、対外的な通商条約実施の時代へと入っていくのである。ジョセフ・ヒコは、この間アメリカ政府の一員として、日本側（幕府側）とアメリカ合衆国側との間で繰り広げられた外交交渉に直接立ちあった。ヒコはその日の感激——「日米の交渉を通じてのトランス・オーシャニック・トレードの夜明け」を次のように記述している。この日のヒコの文章は一段と生彩を帯びているようだ。

This was the date that had been fixed for us to land, to take up our residence on shore, and to formally open the port for the trade. The day broke very fine, and at any early hour all the masts in the Bay were gay with bunting. About ten o'clock we landed on the Kanagawa side, and walked up to the temple of Hongakuji. In the Temple, Ceremony was a large tall tree, and to the topmost branches of this we had tied a pole to serve as a flagstaff. A little before noon the U.S. Minister, Mr. Harris, Consul Dorr, the Captain and the officers of the Mississippi, Van Reed and myself, sailed out into this graveyard. At 12 o'clock precisely we ran up the American colours on this flag staff. Then we opened champagne, sang the Star-spangled Banner, and drank "To our prosperity, Long may the Stars and the Stripes wave!" This was the first time in the annals of the place for a foreign flag to be unfurled.⁽⁶⁾

前述したように当時、武器としての英語を対外交渉の際、駆使できる日本人は稀であった。同時に日本語を解する外国人も無きに等しかった。アメリカ側の通弁士であったヒュースケンの日本語の知識も限られていた。日本側にも秀才通訳はいたが英語の力はおのずから限界があった。「英語に通ずる日本人、日本語のわかる外国人のいなかった幕末では、日本に繰る外国人は、オランダ語を知らなければ、話ができなかった。ペリーの『遠征記』によれば、一八五三年、浦賀入港の時、首席通訳——堀達之助は、サスケハナ号に横づけした防備船から、立派な英語で“I can speak Dutch.”「私はオランダ語が話せる」と叫んだという。そして、堀の英語は、それだけというのが精いっぱい、あとはすべてオランダ語であった」と、近盛晴喜も指摘する。しかも、そのオランダ語は、船長や商人が二百五十年も昔に使用した古いオランダ語であった、と外交交渉にあたる担当者の不便さが大抵のものではなかったことを記録している。

日英関係で活躍した英国大使のオルコックも、日本側の通詞の語学力については、かなり批判的な記録を残している。例えば、オルコックは同氏の著書「大君の都」の中で、日本側の外国使節団側の通訳のオランダ語の運用能力についてまでも言及し「文法的にでたらめだ……。恐れいった」と非難している⁷⁾。

オルコックはハリス以上に英語通詞の粋を越えたヒコのメディエーション力を買った人物であった。例えば、1859年4月ヒコが香港から日本へ向かう途中、オルコックはヒコを招待し「英国領事館の通訳に迎えたい」と懇願したほどである。ヒコの友人のダン(伝吉)がオルコックの召使いめいた仕事をしていたこともあり、自分が通訳で英国領事館に務めることは何となく具合が悪いこと。それに、アメリカ合衆国の国家の人々からも、なみなみならぬ援助と親切な待遇を受けていることもあるという理由で、オルコックの申し出を丁重に断ったことなども、有名な話である。

この不便な幕末の外交界にあって、日本語と英語を直結し、しかもかゆいところに手のとどくようにしたのは、ジョセフ・ヒコであった。ヒコがハリスとの対談で、ベテランの森山や堀の両通訳の解しかねた交渉の際の用談を明確に補足し、日本側とアメリカ合衆国側との紛争調停のメディエーションを行った記録がある。単に日米間の交渉の場だけでなく、井伊大老斬たるの報に、ハリスは真相を知るため大急ぎでヒコを捜さなければならない始末であった。

ヒコのメディエーターとしての役割は、アメリカのみならず、英国、それにロシアにも及んだ。ロシアのシベリア提督ムラビヨフが江戸を訪問中、品川で軍艦乗組員の一人が斬られ、二人が傷を受けるという事件が起こった。これは、初めて日本人が外国人を殺した「見習士官暗殺事件」であった。犯人捜査の「交渉」もなかなかはかどらなかった時、まだ

るこっさに痺（しび）れをきらしたロシア側は、ヒコに通訳を頼み、その結果「交渉」はスムーズに運んだ。ヒコの協力でロシア側は、その御礼としてヒコに時計を送った。このことは、「ヒコ自伝」にも記録されている。

「日米の国家を背負う」

1863年5月、長州が関門海峡を通る外国の軍艦に発砲するという砲撃事件が起きた。下関海峡で風雨を避け順潮を待っていたアメリカ商船「ベムブローク号」に長州藩の船二隻が接近し、突如砲撃したのである。これが「下関事件」である。

列国は幕府に抗議した。6月にアメリカの軍艦「ワイオミング号」が下関海峡を通過中、攻撃を受けたため反撃し亀山砲台を破壊させた。アメリカの「ワイオミング号」には、日本側との「交渉」に備え、ヒコが乗船していた。アメリカ側は日本側に対し、その戦力の差をまざまざと見せつけたのである。自らの祖国に向かって砲弾を放つ側に身を置いたヒコ。ヒコが目撃したのは、大国アメリカ側に対しあまりにも無力な日本の姿であった。ヒコはこの事件について次のように記録している。

“Mr. Heco, you will be on board the Wyoming at 4 o'clock sharp without fail. Wishing you a pleasant voyage.

Yours truly,

Signed E.S.F.— U.S. Consul. July 12th, 10 o'clock p.m.

...The gunners on shore (in Shimonoseki) clearly meant Business. At the first fire Captain McDougal ordered the quartermaster to hoist the American flag at the peak.... But the people on the shore paid but scant respect to our colors; their fire grew hotter. So the Captain gave the order “Make ready for action.”

The big 64 pounder guns were at once run out and opened upon the batteries on the shore. At precisely 10.50 p.m., we ran right in between the three Choshu vessels, and treated them to a salute from our two Dahlgren guns....But it was not at all nice or comfortable to hear them whizzling and screaming aloft among our riggings⁽⁸⁾.

これまでアメリカ人としてアメリカ側に立っていたヒコは、この下関事件以後、日本の国家体制に危惧を抱いたと同時に積極的に日本に関わろうとしていく。この事件の二ヶ月後に通訳として勤務していた米国神奈川領事館に辞任届を提出。その後、ヒコは横浜で貿易商社を開いたのである。

September 30, Received intimation from Washington that my resignation of the office of interpreter to the U.S. Consulate at Kanagawa had been accepted. Accord-

ingly left the Consulate and again started in business in Yokohama⁽⁹⁾.

そして、ヒコはこれまでの外国体験を基に、新しい時代を切り開こうとする人々のために、ミディエーターとしての自分を生かす道を模索することになるのである。

「ヒコ日本国籍を考える」

当時の日本には、帰化法はできてはいなかったが、ヒコは下関事件の時に日本国籍を取る決意をしたという。日本で帰化法が設定されたのは明治 32 年(1889 年)であり、明治 32 年に死去したヒコは、生涯をアメリカ人として過ごした。ヒコは、神戸時代に結婚した銀子婦人を「日本人」として、明治 12 年 7 月に「浜田」の家名を再興させ自分も「浜田彦蔵」として日本人別に戻ったつもりであった。

ヒコは「漂流記」の中で「……亜国に恩人、信友多、其上異国の言語・筆算は日用に差支なし。日本の事は習へなければ、事毎に差当活計の目当なく、乍レ去（さりながら）父母の国なれば、異国の人別（じんべつ）にて終わらんも本意ならず。希（ねがわ）くは日本の読書（よみかき）をも学び、時を得て日本人別に戻り、亜国と日本の両間の為に微功をいたし、国音を報ぜんことを願うばかりなり」と語っている⁽¹⁰⁾。

1863 年の「下関事件」以来、諸外国の実力を知った薩摩、長州の両藩は、攘夷ではなく倒幕によって、新たな時代を切り開く方針を打ち出し。ヒコは、海外情報を求めに訪問してくる倒幕府勢力の中に自分を生かす道を探ろうとしたのである。

「日本の変革に関与」

1865 年、ヒコは徳川幕府に国家体制案を提出した。アメリカの憲法を基礎に近代国家としての日本の仕組みを描き出そうとした。その際、最大の特徴といえば次の三つのグループから成る三院制であり、議会も定められていた。

大評定所

第一に「国司大名」、第二として「諸大名」、第三には「大百姓・大町人」であった。しかし、あまりにも急速な提案に幕府側は見向きもしなかったのである。当時、英国公使館の通訳であったアーネスト・サトウは、大政奉還についても木戸や伊藤からではなくヒコ自身からではなくヒコ自身から聞いたことを、著書“A Diplomat in Japan”の中で次のように述べている。9 月 12 日と 14 日のことである。

「(十四日)、長崎を訪れたサトウは、茶屋で木戸と会った。) 帰途、私が彦蔵(有名な彦蔵)を尋ねると、彼は一つの文書について私に話した。その文書は、薩摩・土佐・芸州・備前・阿波の諸侯の連名で、将軍慶喜に辞職を勧告し、また政府を改造する道を開くこと

を要求して、将軍に提出されたいというのだ⁽¹¹⁾。

The 14th I spent with Ito and Katsura (kido) at a teahouse called Tamagawa, away at the back of the town close to the stream which flows down through it. We had a long discussion on Japanese politics, domestic and foreign, ending with the conclusion that Europeans and Japanese would never mix, at least not in our time. On my way back I called on Hikozo (the well-kown Joseph Heco), who told me of a document, said to be signed by Satsuma, Tosa, Geishiu, Bizen, and Awa, to resign his office and allow the government to be reconstituted.⁽¹²⁾

このようにヒコは当時、大政奉還について流動する日本の歴史や事情について知らない外国からの外交官や商人のために、木戸孝充から依頼されたとおりに陰となり日なたとなり国の開発それに国際秩序の開発という視点から、水先案内人（メディアーター）として尽くしていたのである。[Part 1了]